

MfG_J_Reishuukai_TamuraBunshirou_TakahashiSuison

令終会、田村文四郎と高橋翠村

2019年は、悠久山公園100歳記念の年でした。令終会設立の中心となった山田又七、田村文四郎二人の胸像も、堅正寺近くに建立され、お山に意義深い名所が、増えました。

山田又七については、別に「山口権三郎、山田又七」のガイド説明を作成していますので、ここでは、田村文四郎と高橋翠村について、ガイド説明をまとめました。

1. 田村文四郎と北越製紙

- (1) 田村屋から田村商店へ
- (2) 6代目田村文四郎
- (3) 田村文吉
- (4) 北越コーポレーション株式会社

2. 高橋翠村

- (1) 明治から大正期に新潟県の中越で活動した漢学者、教育家、書家
- (2) 藩の馬政に関わる長沢家の生まれ
- (3) 養嗣子となって高橋姓
- (4) 小林虎三郎の再評価に貢献
- (5) 星野保子像刻文撰者

3. 悠久と至誠

- (1) 中庸にある「至誠」と、蒼紫神社によせた忠精公の言葉
- (2) 山本五十六記念館にある「至誠」

令終会の命名 高橋翠村

会津八一の年譜ノートに「一八九五(明治二十八)年、新潟中臈一年級に入学す。習字は高橋翠トンに学ぶ」とある。
のように、会津八一の書の先生として知られている。

参考 解説抜粋

中庸章句第二十五章

高橋翠村について(まちづくり市民研究所 第2期 報告書)(2015)

高橋翠村2_長岡アーカイブ14号 連載 長岡の碩学(14)(2017)

そのほか、妻有の人物史Ⅰ(平成二年 十日町市博物館)

1. 田村文四郎と北越製紙

(1) 田村屋から田村商店へ

1753年(宝暦3年) -260年前- 初代田村仁之助が長岡の地に瀬戸物を商う「田村屋」を創業。堅実な商いによって成長し、3代目田村文四郎の頃に、瀬戸物のほかに、日本各地から紙を取り寄せて販売を行なう紙の卸業を開始、今の田村商店の礎が築かれた。

(2) 6代目田村文四郎

その後、6代目田村文四郎は町会議員を勤め、道路や橋、令終会など、会社地域の基盤づくりに尽力。さらに、1907年(明治40年、北越製紙株式(現北越コーポレーション)を創立、明治末期には紙製品・文具の卸業を開始。

昭和に入り、日支事変に始まった統制経済下では、新潟県ノート販売会社を設立。県内学校教育を支える役割を中心的に果たすなど、地域とともに歩む。

(3) 田村文吉

田村文吉(1886年－1963年) 政治家、実業家。参議院議員。第8代長岡市長。長岡市名誉市民。長岡の紙問屋・田村文四郎の三男として生まれる。

新潟県立長岡中学校を経て、東京高等商業の専攻科を卒業、越後鉄道に入社、その後、1915年、父たちが設立の北越製紙(現・北越コーポレーション)に支配人として入社し、1934年に専務、1940年には社長に就任。

工場の新設・拡充をリードし、北越製紙を現在の規模に育て上げた。

1928年には長岡工業会を設立。

1945年8月1日の長岡空襲で市長・鶴田義隆が殉職すると、その後任に推されて9月に第8代長岡市長に就任、長岡市の戦災復興に精力的に取り組んだ。

1947年、参議院議員。後に第3次吉田内閣で、郵政大臣兼電気通信大臣。財団法人積雪研究会の会長となり、長岡工業専門学校(旧新大工学部)附属工業博物館を借用して積雪科学館を創設、後継の市立科学博物館の建設も支援。1963年死去、長岡市葬が営まれ、長岡市の名誉市民となった。

(4) 北越コーポレーション株式会社

日本第5位の製紙会社。製品は洋紙(コート紙・印刷用紙)、特殊紙など。

1907年(明治40年)5月9日一越後平野からもたらされる稲藁を原料とし、物流を促進する紙器向けの板紙の生産を開始。

本店・研究所一新潟県長岡市西藏王3丁目5-1

本社一東京都中央区日本橋本石町3丁目2-2

生産拠点は長岡工場など県内二工場、関東、関西に各二工場、ほか海外クリーンルーム向けのエアフィルタに関する技術は世界屈指といわれている。

北越コーポレーション株式会社(英:HokuetsuCorporation)
日本第5位の製紙会社である。製品は洋紙(コート紙・印刷用紙など)、
白板紙、特殊紙など。

製紙業界の中でも、生産効率の高い会社といわれている。

本店・研究所一新潟県長岡市蔵王3丁目5-1

本社一東京都中央区日本橋本石町3丁目2-2

大阪支社一大阪府吹田市南吹田4丁目22-1

生産拠点

新潟工場一新潟県新潟市東区榎町57

紀州工場一三重県南牟婁郡紀宝町鶴殿182

長岡工場一新潟県長岡市蔵王3丁目2-1

関東工場(市川)一千葉縣市川市大洲3丁目2ト1

関東工場(勝田)一茨城県ひたちなか市高場1760

大阪工場一大阪府吹田市南吹田4丁目20-1

1907年(明治40年)5月9日一越後平野からもたらされる稲藁を原料とし、
物流を促進する紙器向けの板紙の生産を開始。

1旦17年(大正6年)2月一北越板紙株式会社を買収、新潟工場とする。

1920年(大正9年)12月一市川工場換業、上質紙の生産を開始。

2009年(平成21年)10月1日一紀州製紙を完全子会社化。

社名を北越紀州製紙株式会社に変更。

2018年(平成30年)7月1日一北越コーポレーション株式会社
(HokuetsuCorporation)社名変更。

日本の製紙業界

王子ホールディングス

日本製紙

レンゴー

大王製紙

北越コーポレーション

リンテック

15000三井、第一勧銀グループ

10500 三井、芙蓉グループ 旧十健製紙

6000 独立系

5300三和グループ 王子、神崎、本州製紙

2700 三菱グループ

###

2. 高橋翠村

- (1) 明治から大正期に新潟県の中越で活動した漢学者、教育家、書家
書家として碑文
令終会の命名者
星野嘉保子碑

会津能書家として知られる会津八一の新潟中学時代の、
習字の先生であったが、翠村は晩年、八一の書を、自分の
弟子にあるまじき書であると嘆いたという。

長岡中学では、明治33年から45年まで国語と漢文を担当した。
新潟中学、長岡女学校ほか、多くの学校で教鞭をとった。

- (2) 藩の馬政に関わる長沢家の生まれ
-
- 初代 基茂 — 二代 茂好 (シゲヨシ, 存鬼) — 三代 茂泰 (シゲヤス, 赤水) — 四代 茂昭 (シゲアキ, 赤城, 金太郎) — 五代 矢一郎
- 三代 茂泰 — 茂由 (赤山, 慎五郎)
- 四代 茂昭 — 茂一郎 (高橋翠村)
- 茂一郎 (高橋翠村) — 養嗣子
- (慎五郎) 秋山郷の恩人の高橋家に入婿し、高橋に改姓 (主に十日町で活動)

長澤家は、長岡藩の馬政に関わる家（馬政とは軍馬に関する一切）
父・茂昭は江戸で調息流馭法を学び、崇徳館教授となる。恭順派。
戊辰戦争では騎乗に優れたものとして使番の役で奔走。
会津・飯寺で戦死した。

- (3) 父の戦死後、秋山郷に住む大叔父・茂由を頼って移り住み、
大叔父から養育を受け、後、養嗣子となって高橋姓となった。

- (4) 小林虎三郎の再評価に貢献

(5) 星野保子像刻文撰者

故星野嘉保子女師銅像



女師星野氏銅像記

女師名嘉保本姓小川氏幼爲長岡醫星野宗仙所養其姓義父早歿門祚淪落女師勤女工奉養母極厚義母爲許納學生某爲夫婿未醢某病歿女師守志終身性精慧博綜技藝略通儒佛書有識見擢爲縣女紅塲取締年四十二創立長岡女學校實爲縣下女學校嚆矢當時人皆異而笑之女師曰今之世女子亦不可不學苦心經營築校舍至再生徒淑婉有守明治三十七年以衆望爲縣女子教育會副會頭一日誨琴生徒忽發疾隱翠而伏翌朝遂逝是年十二月十九日也年五十七從任勝嗣家承業光昭遺教生徒益進大正十一年有所感而閉校前後三十有三年生徒四千八人追懷女師而不已相謀鑄銅像建于悠久山鳴呼亦可以見其德入人之深矣

大正十二年六月

北粵處士 高橋茂 撰並書

長岡女学校謝恩会幹事
没後19年 發起人 父兄側10名の中に
坂牧善辰、木村清三郎の名がある

銅像鑄造 巨匠武石弘三郎

刻文撰者 鴻儒高橋翠村翁

～ 中庸の「至誠」、蒼紫神社の悠久・高明、山本五十六の「至誠」

(1) 中庸にある「至誠」と、蒼紫神社によせた忠精公の言葉

至誠無息（しせいむそく）は、中庸章句第二十五章の冒頭の句です。「至誠は息むこと無し」と訓読みされ、第二十五章（章の分け方は諸説）の全体では、この上ない「誠の心」をもって生涯を貫きなさい、という意味、悠久とは、永遠というより、万物を成り立たせる偉大なはたらきを言う言葉、そして高明とは、万物を覆い尽くす大空を示すという意味とされます。尚、この第二十五章の前の章でも、至誠は知と仁の総和と言及しており、中庸には、この他にも随所に「至誠」に言及しているところがあるようです。

「蒼紫神社由緒略記」によれば、天明元年(1781)に現社殿の造営竣工の祝典に、忠精公が「中庸」より語を選び、山を悠久、表参道を高明、裏参道を無疆(むきょう)と命名されたとされています。

その参道の名が、拝殿前の門の名称となり、(表の)高明門と(裏の)無疆門となったわけです。そして、その名の由来が、第二十五章の最期の句の「博厚配地、高明配天、悠久無疆」の中で、示されています。悠久山、高明門、無疆門、至誠という、なんと深い関連を有した言葉、まさに、「万物を限りなく覆い尽くす大空のごとき、至上の誠」、です。

(2) 山本五十六記念館にある「至誠」

山本五十六記念館に、五十六さんの「至誠」の書があります。そして明治天皇御製という、五十六さんの書も、その近くに展示されています。

「ときおそきたがひはあれど貫かぬ こと無きものは誠なりけり」

Any act out of the sincerity would be accomplished successfully.
もうひとつ。

「いかならむときにあふとも人はみな まことの道をふめと教へよ」

Walk a road of the truth at any time you encounterd trouble .
これらも、「至誠」と同じ心を詠んだものと思いますが、この中庸の句に示された「至誠」の意味するところを知ると、もともとは為政者としての志、覚悟として味わうべきものなのかも知れません。

このように、五十六さんが「至誠」を中庸の中の言葉として意識したのも、もしかしたら堅正寺住職と親しく話している中だったのではないかと、とも思いました。

堅正寺の山号も「悠久山」であり、悠久山と中庸の強固な縁を感じます。元々、堅正寺住職は、五十六さんの長岡中学同期で親友の二代駒形宇太七がスカウトした高僧です。

五十六さんの「至誠」については、この他にも、いろいろなトピックスがあります。悠久山だけでなく、どこでもガイドできるよう、考えたいと思います。

以下は、中庸章句第二十五章の全文です。

故至誠無息。不息則久、久則徵。

故に至誠は息むことなし。息まざれば則ち久しく、
久しければ則ち徵(しるし)あり、

よって、この上ない誠の心のはたらきは止まるときが無い。
止まることなく長く続けば、その効果があらわれることになる。

徵則悠遠、悠遠則博厚、博厚則高明。

徵あれば則ち悠遠なり、悠遠なれば則ち博厚、博厚なれば則ち高明なり。

(このように誠は) その効果があらわれると、はるか遠くまでゆきわたる、
はるか遠くまでゆきわたると、それはひろびろとして厚く行なわれる
ひろびろとして厚く行なわれると、それは高々として高明に
あふれて行なわれることになる。

博厚所以載物也。高明所以覆物也、悠久所以成物也。 載(の)する

博厚は物を載する所以なり。高明は物を覆う所以なり。悠久は物を成す所以なり
博厚とは、万物をその上に載(の)せるはたらきによるものであり、
高名とは、万物をその上に覆(おお)うはたらきによるものである、
悠久とは、万物を成立させるはたらきによるものである。

高明所以覆物也。悠久所以成物也。

高明は物を覆う所以なり。悠久は物を成す所以なり。

高明とは万物を覆う(大空の)はたらきによるものであり、
悠久とは万物を成立させるはたらきによるものである。

博厚配地、高明配天、悠久無疆。 無疆 (むきょう)

博厚は地に配し、高明は天に配し、悠久は疆(かぎ)りなし。

博厚であるということは大地のはたらきと一致することであり
高明であるということは大空のはたらきと一致することであり
それが悠久とは、その成り立つ世界が無限無窮ということである。
(この上ない「誠の心」とは、そのようなものなのである。)

如此者、不見而章、不動而變、無為而成。

此の如き者は、見わさずして章らかに、動かずして變じ、為す無くして成る。

だから至誠を身に備えている者は、ことさらに事を為そうと右往左往
しなくても、自然と世の中を治める事が出来るのである。(それ故に至誠を
身に備えている聖人君子は人々から尊び敬われるのである。)

以上は、下記を参考にしたものです。 漢文には句読点を追加しました。

<http://fukushima-net.com/sites/meigen/1534>

<https://open.mixi.jp/user/17180778/diary/1940308230>

妻有の人物史Ⅰ（平成二年 十日町市博物館）

高橋翠村(茂一郎)の抜粋 ～ 筆者は田村喜一氏(市史調査員)

高橋翠村(1854-1945)

長岡 千手の、代々学問と武術で藩に仕えた長沢家に生まれる。
9才で崇徳館に通う。
父親は崇徳館教授を務めたが、戊辰の役で会津飯寺にて死亡。

そのとき15歳の茂一郎は、大叔父・慎五郎を頼って津南に移る。
村の住人、高橋六左衛門の助力が大きく、大叔父・慎五郎は
高橋家の養子となる。子供のいなかった慎五郎は茂一郎を
嗣子とした。

明治6年、慎五郎、茂一郎ともに十日町小学校の教師となる。
慎五郎の死後、明治12年、茂一郎は向学の志やみがたく、
意を決して退職、上京し、二松学舎に学ぶことになる。

以下、一部分、コピー添付。
長岡アーカイブ14号の 高橋翠村も、添付した。

会津八一の年譜ノートに「一八九五(明治二十八)年、
新潟中臈一年級に入学す。習字は高橋翠トンに学ぶ」とある。
翠邨先生

高橋翠村について(まちづくり市民研究所 第2 期 報告書)

まちづくり市民研究所 第2 期 報告書

「米テーマ 百俵の精神」伝承・実践プログラムづくり
(p22)

※10 高橋翠村 (1854-1944年)

安政元年(1854)に長岡藩士で崇徳館教授を務めた長沢金太郎(号・赤城)の第二子として生まれ、茂二郎と称した。山田愛之助から儒学、虎三郎から詩文の指導を受けた。明治3年に中魚沼郡川治村(現・十日町市)の高橋六左衛門家に入婿して茂一郎と改名した。明治5年(1872)に十日町小学校の初代校長となった。12年から14年にかけて東京の二松学舎で学んだ。帰郷後は高山村(現・十日町市)で静雲精舎を立ち上げて漢学を教えた。明治20年からは新潟農学校・北越学館・新潟県立新潟中学校(現・新潟高等学校)などで教鞭を執った。明治33年から45年まで長岡中学校で国語と漢文を担当した。学識深い授業内容と熱心な指導は多くの生徒に影響を与え、本富安四郎(「和同会」中興および「第一校歌」作詞)とともに校史にその名を深く残している。同校退職後は長岡女学校(星野嘉保子が明治22年に創立)および長岡実業女学校で教えた。長き教職の傍ら、虎三郎の研究を進めるとともに、無臭学舎を創設して長岡の企業家をはじめ市民に広く漢学を講じた。また、大正8年には長岡孔子祭典会(後の斯文会長岡支部)を設立している(長岡市史編集委員会近代史部会編『市史双書No.25 静雲精舎存稿』長岡市、1993年)。

高橋翠村撰による「病翁小林先生伝」

虎三郎の事績がより子細に叙述されている。その結語には「況んや其の学を興し俗を振ひ、功の一地方に止る者、誰か能く知りて称述せんや。則ち先生は畜学校を豊かにして命に穀きのみならず、実に於て泰かにして、名に於て約かなる者と謂ふ可きなり。長岡の人今に到つて、痛惜して措かず、碑を堅てて以て之を表す」(『静雲精舎存稿』)と記し、虎三郎の再評価がなされていたことが示唆される。

妻有の人物史Ⅰ（平成二年 十日町市博物館）

高橋翠村(茂一郎)の抜粹 ～ 筆者は田村喜一氏(市史調査員)

高橋翠村 (1854-1944)

長岡 千手の、代々学問と武術で藩に仕えた長沢家に生まれる。
9才で崇徳館に通う。

父親は崇徳館教授を務めたが、戊辰の役で会津飯寺にて死亡。

そのとき15歳の茂一郎は、大叔父・慎五郎を頼って津南に移る。
村の住人、高橋六左衛門の助力が大きく、大叔父・慎五郎は
高橋家の養子となる。 子供のいなかった慎五郎は茂一郎を
嗣子とした。

明治6年、慎五郎、茂一郎ともに十日町小学校の教師となる。
慎五郎の死後、明治12年、茂一郎は向学の志やみがたく
、意を決して退職、上京し、二松学舎に学ぶことになる。